

The message from

Y. Kazuko

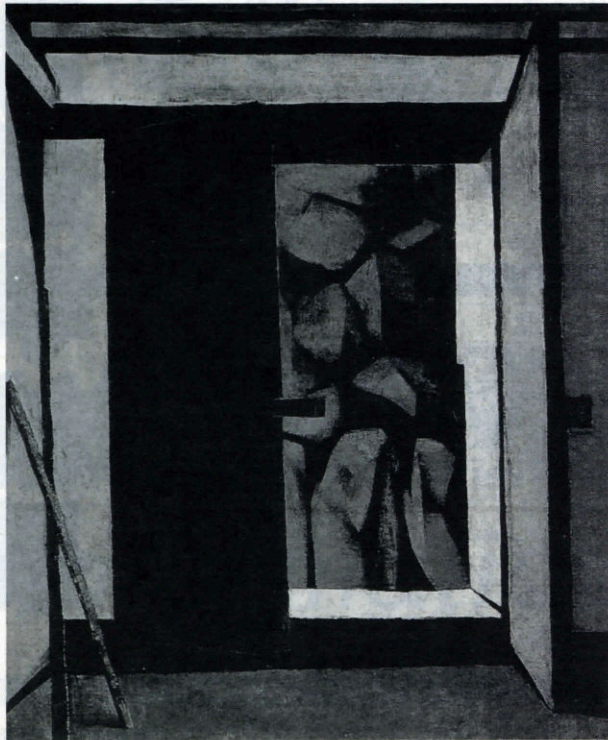
Museum of Misumi

～美術館からのメッセージ～

# 透明感に見る 抒情的作品

## 門・石垣

1940年 72.7×60.8<sup>号</sup>



らく夏休みの帰省中に着想されたのだろうが、情景自体は子どもの時から脳裏に焼きついていただろう。半開きの戸口から裏山の石垣が見えているというだけ取り立てて変わったこ

## コントラスト 強烈な印象

この時期の香月の作品には、こうした陰影表現が多く見られる。陰影は時間を感じさせる。ここにはまだ現われていないが、後に続く作品ではシルエットや後ろ姿の少年の姿がしばしば登場する。自分の少年時代への思いが重なっているのか。あるいはまた、その影には戦争に突入していく時代の翳りも含まれているのだろうか。

(下関市立美術館・濱本聡学芸員)

## 「香月泰男展」から

③

下関高等女学校赴任中の作品である。この頃の香月泰男

は、結婚、長男の出生、文展での特選と続いて、生活と制作両

面で充実した時期を迎えている。作風も、自分に親しんだモチーフをモダンな語り口で表現しながら、そこに詩情性も漂わせている。

この時期の香月の作品には、こうした陰影表現が多く見られる。陰影は時間を感じさせる。ここにはまだ現われていないが、後に続く作品ではシルエットや後ろ姿の少年の姿がしばしば登場する。自分の少年時代への思いが重なっているのか。あるいはまた、その影には戦争に突入していく時代の翳りも含まれているのだろうか。

香月家は、代々漢方医の家柄で、画伯の少年期に、祖父は三隅村(現三隅町)の村長であり、お医者さんでもありました。その為か、大変厳格できびしい人柄であったようです。歯科医専に学び後継者であった父は、画伯が幼少の頃出奔したため、両親とは暮らす事はなく、生涯合

うこともありませんでした。このため、画伯は厳しかった祖父母に育てられるのですが、家業が忙しい事もあったためか、少しでも悪い事をすればすぐに暗い土蔵に放り込まれたのでした。時には土蔵に入れた事を祖父母は忘れ、一日中土蔵の中で過ごしたこともあった様です。

今月は「門・石垣」という作品を掲載しました。この絵は、画伯の生家の裏庭へ通じる門(木戸)を描いたものですが、この時期の頃からの絵画(作品)には、少年時代を回想したものが多く取り入れられている様であり、抒情的作品が増えている様に思われます。

そして、この年(昭和15年)「棚と壺」「枯れカンナ」が第15回国画会に入選し国画会同人に推荐され、さらに佐分賞を受賞。画伯はいよいよ確実に地歩を築き上げられて行くのです。

(協力) 山口新聞社